

『天声人語』にみる今日の日本の姿

周 琛

【キーワード】天声人語、季節文化、国際関係、環境

1. はじめに

『天声人語』とは朝日新聞の朝刊に600字で連載されているコラムである。これは毎日の記録と言うことでは、まさしく新聞社の「コラム日記」と呼べるものである。その内容は読者の関心をもつニュース・スポットを取り上げ、日本人の生活と文化、国際関係、政治、社会問題、さらに環境、自然災害など、たいへん多岐に渡っており、『天声人語』は自らそのことを「森羅万象をあざやかに切り取る代表的新聞コラム」と呼んでいる(『天声人語』2002年1-6月の帯書き)。森羅万象とは宇宙に存在する「有りとあらゆるもの」という意味であり、毎年大学の入試問題では多くが採用されている。本年度(2005年)の大学入試ではなんと253大学388問題451記事が採用された(朝日新聞PR版 2005年大学入試特集 2005年6月14日)。

朝日新聞社の全国紙の発行部数は1000万部の読売新聞社と並んで約800万部である。この全国紙には朝刊と夕刊があり毎日二回全国に配達される。この発行部数は日本の総人口約1億2500万人に対してだから、中国なら約10倍の計算でざっと8千万部に相当し、これから、いかに多くの読者が見ているかが分かる。そして天声人語には毎日読者から多くの手紙やメールが寄せられており(朝日新聞広報部の回答05年7月19日)、大学入試同様ここにも注目度がよく反映されていることが分かる。

さて、今まで中国の日本語教育においてはその高い文章力のゆえに多くは日本語中級から上級の読み物として使用されてきた。しかし、この「コラム日記」から今日の日本の断面を見るような研究はまだ見られていない。

そこで、本研究では『天声人語』の分析を通して「今日の日本の姿」とらえることにした。この目的を達成するため、本論文では、2. 分析方法、3. 大分類ごとの数量的考察、4. 特徴的な記事内容の考察という構成で展開した。

2. 分析方法

1) 分析範囲

『天声人語』の分析では、大まかにその「大分類」を見出すところから始まる。それには範囲を大きくとり「2000-04年版」を対象とした。

次は、この大分類を基礎に中分類→小分類へと階層図を作成してゆく。この詳細な整理は、21世紀開始の「2001年版」と最新資料の「2004年版」の二年分で展開した。

2) 大分類の抽出と【階層図】の作成

[大分類の抽出]

先ず、大分類の抽出に当たっては、季節文化、芸術・芸能、教育、食文化などの社会文化に関するもの、社会風景と社会世相などの社会視点、政治と言葉、反戦文化などの政治視点、国際視点、それから環境、「その他」等、12項目の観点を提示し、そこから調査、検討した。ここで「その他」を設けたのは追加・補正等の柔軟性を求めたからである。

その結果、次ぎの三つに圧縮されて出されてきた。

① 季節語 ② 国際関係 ③ 或る事件に関する中日メディアの報道の差
 この中で『天声人語』を整理するにあたって特に重要だったのは「伝統的な内容」を意味する「季節語」と「国際関係」であった。

次に、この考え方を念頭に、「国際関係」に対しては「国内関係」、更に、「環境と自然災害」を付加し、ここに「国内関係、国際関係、自然と人間」という大分類が抽出された。

【階層図の作成】

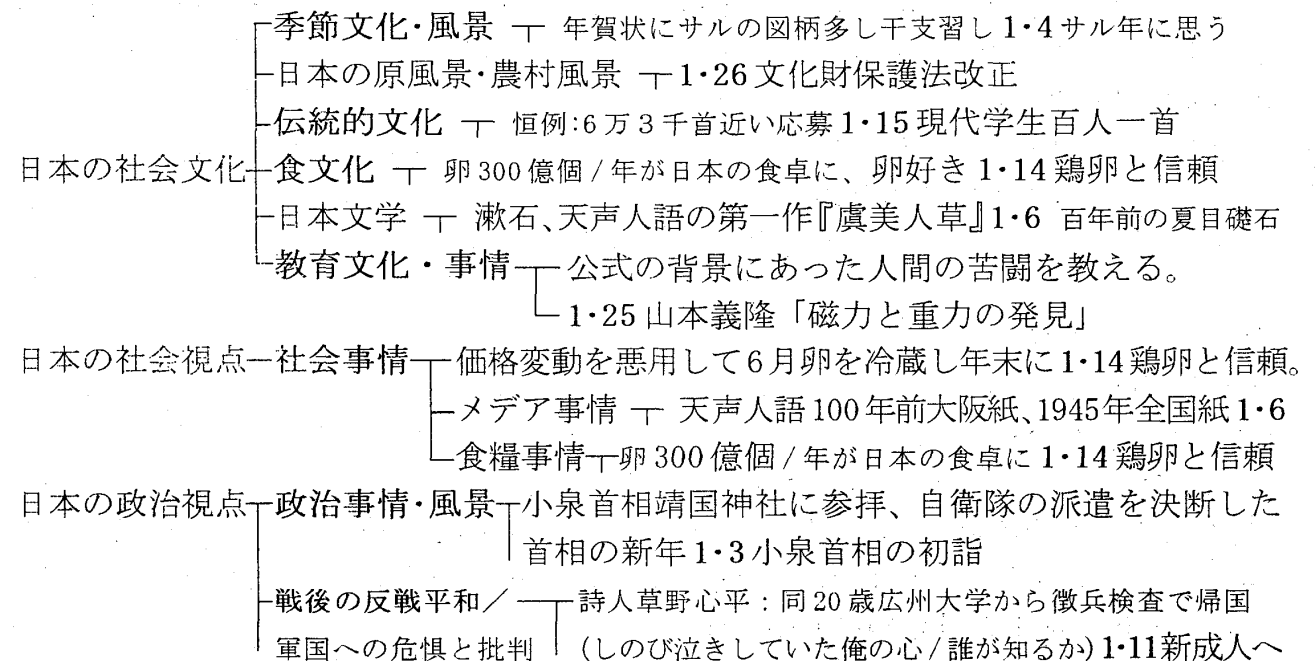
上記大分類「国内関係、国際関係、自然と人間」を念頭に、【2004年1月】版を使って実際に階層図を試みたのが下記【図1】である。

この図からも分かるように各大分類の中分類は、それぞれ「社会文化、日本の社会視点、日本の政治視点」、「国際視点、国内・国際視点」、「環境問題、自然災害」の計7項目に具体化された。

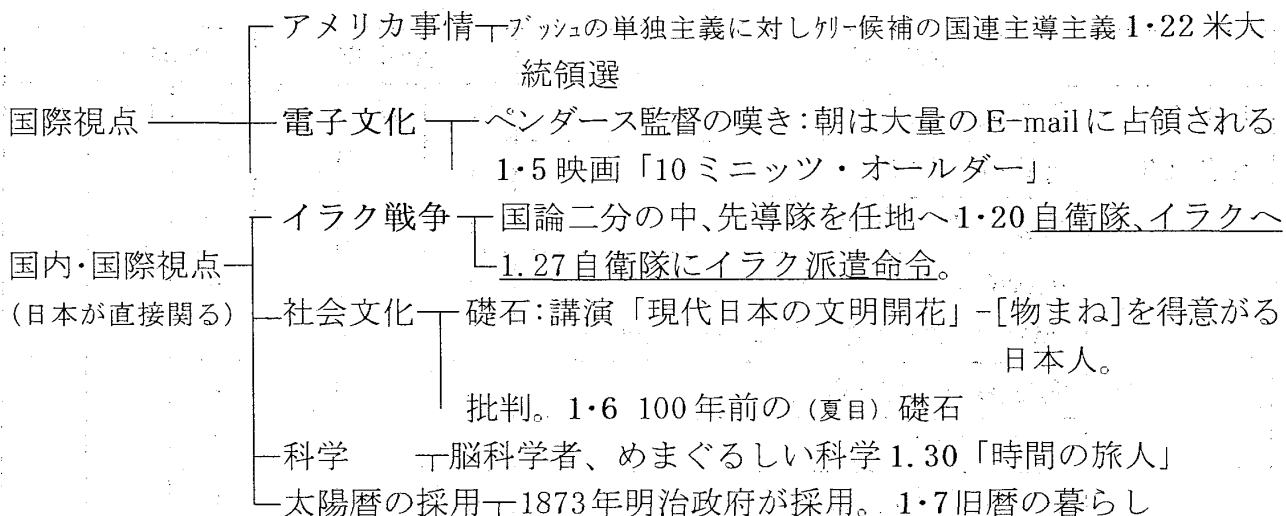
【階層図】の完成度は、この【図1】を出発点に2001年と2004年の全24ヶ月に関して、順次追加・補正を加えながら発展させて行った。

図1 【2004年1月】の階層図例 (一部抜粋)

【国内関係】



【国際関係】



【環境と自然災害】

- 環境問題 — 地球環境 — 環境省が自然エネルギーを景観で規制
 - 1・21 風力発電
 - 自然災害 — 災害と支援 — [神戸市在住の詩人安永さん]1995年震災にあう。災害の記憶を強調、この先生き延びるために
 - 1・17 大震災と詩人
- (註：「1・4」などは日付。また「同じ日付」は重複記事を表す)

3. 大分類ごとの数量的考察

1) 国内関係

【表1】は【日本の社会文化、日本の社会視点、日本の政治視点】における[記事数]を示したものである。以下、一つずつ分析してみよう。

(i) 日本の社会文化

まず、この分類では「季節文化・風景」が最も多く、日本人には季節感が重要であることがよく分かる。次に、歌舞伎、茶道などの伝統的文化、そして教育文化・事情、食文化などが続く。ここで面白いのは、こうした古来の文化の中に、携帯・パソコンなどの最新文化が自然と同居していることである。

桜の花見をし、また、華道もしながら携帯やパソコンということであろうか。

(ii) 日本の社会視点

この分類は、単なる社会の様子を示す「社会風景・情景」だけでなく、社会的な問題点を含む「社会事情」や、事件や犯罪を含む「社会世相」が多くあり社会は穏やかでない。特に「社会事情」では企業・金融、メディア、食糧、健康・ケア・薬などの諸事情が浮かび上がっている。

(iii) 日本の政治視点

ここでは一般的な「政治事情・風景」と、もう一方、「戦後反戦平和／軍国への危惧・批判」が主流であった。特に、後者は戦後日本の[平和]への国民の思いが反映した結果であろう。

表1 【社会文化、日本の社会視点、日本の政治視点】における[記事数]

階層図		2001年			2004年		
日本の 社会文化	季節文化・風景	17	87	94	19	68	77
	自然・自然観察	4					
	社会批評・人生観	4					
	伝統的文化 (歌舞伎・舞踊・華道・茶道・能・落語・浪曲など)	9			8		
	歴史論・文化史・遺産	3			6		
	国語学・言葉	6			5		
	日本文学(明治以降)	6			6		
	科学・学問	5					
	教育文化・事情	9			5		
	芸・芸術(明治以降)(美・音・映・写 Etc.)	2			4		
	食文化	6			6		
	スポーツ	2			5		
	市民の社会福祉文化	5					
	大衆的ロマン	4					
	最新文化	電子情報文化 (携帯・PC通信)	7	7		4	9
	生命科学・遺伝子組替え				4		
日本の 社会視点	社会風景・情景(様子)	27	27	67	18	18	68
	社会事情 (問題)	社会事情一般	10	30		12	32
		企業・金融事情	7			8	
		メディア事情	3			6	
		食糧事情	5			5	
		健康・ケア・薬事情	4			1	
	社会世相(事件・犯罪)	10	10		18	18	
日本の 政治視点	政治事情・風景	46	53	76	27	27	47
	政治と言葉	7					
	戦後反戦平和／軍国への危惧・批判	20	23		17	20	
	反核平和	3			3		

(註:2001,4年合わせて3個以下の記事は記載からはずしてある)

2) 国際関係

【表2】は、【国際視点、国内・国際視点】に関する記事数を示したものである。

(i) 国際視点

この21世紀初頭はアフガニスタン、イラク戦争とそれを引き起こしたアメリカ関係の記事が圧倒的に多く書かれた。これと関連してテロの記事も多い。そのほか、芸術・文化も多いが、2004年はオリンピックのということもあり、その記事も目立った。

(ii) 国内・国際視点

この分類は、「日本が直接関係する国際記事」である。ここでは、アフガニスタン、イラク戦争と日米関係が最も多い。次には日中関係の記事が安定的に記載されている。

表2 【国際視点、国内・国際視点】における[記事数]

階層図			2001年			2004年		
国際視点	政治・社会	反戦・反核平和	3	73	110	3	86	143
		アフガニスタン	17					
		イラク戦争				30		
		国連・世界	4			1		
		アメリカ事情	17			23		
		欧州事情	7			7		
		アジア事情	2			4		
		パレスチナ・イスラエル	3			4		
		イスラム・アラブ	2			2		
		テロ	13			5		
		食糧事情	2			2		
	文化	科学	5	37	4	57		
		芸術・文化(美・音・映、等)	6		13			
		社会文化(総称・風習・慣習)	4		2			
		世界文学	7		6			
		スポーツ	5		2			
		オリンピック	2		11			
国内・国際 視点 (日本が直接 関わる国際 視点)	政治・社会	北朝鮮	2	50	65	6	55	87
		韓国関係	5			1		
		中国関係	5			6		
		反戦・反核平和	2			2		
		アフガニスタン	6					
		イラク戦争				24		

国内・国際 視点 (日本が直接 関わる国際 視点)		日米関係	14	15		2	32
		欧州関係	4			1	
		9.11 同時多発テロ	5			1	
		食糧	1			3	
	文化	芸術・文化(美・音・映、等)			4		
		社会文化(結婚・習慣)	1		6		
		科学	2		3		
		文学	3		4		
		スポーツ(大リーグ、サッカー)	3		1		
		オリンピック	1		4		

(註:2001, 4年合わせて3個以下の記事は記載からはずしてある)

3) 環境と自然災害

【表3】は【環境問題、自然災害】における[記事数]を示したものである。環境問題と自然災害それぞれの合計は24件、30件とかなり記事が多い。これらは様々な観点で関心が示されていることが分かる。

なお、ここで「環境と自然災害」と題しているのは「環境」も「自然災害」もどちらも人間が自然を相手にするものだからである。

表3 【環境問題、自然災害】における[記事数]

階層図			2001年		2004年	
環境視点		地球環境	2	12	5	12
		環境汚染	2		1	
		生態系・共生	2		2	
		環境文化	2			
		自然・森林、癒し	3		2	
		動物種の保存	1		2	
自然災害	国内	災害と避難・支援	4	9	14	21
		災害情報	1		3	
		防災対策	2			
		復興	2			
	国際視点				1	
	国内・国際視点				3	

4) 3. のまとめ 一大分類・中分類ごとの記事数と分布―

【表4】は上記「2001年」「2004年」両年の結果を、大分類・中分類ごとの記事数と分布(%)でまとめたものである。

ここから言えることは、

第一に、国内関係の合計は48%であるのに対して、国際関係の合計は45%であり、両者はほぼ同じ割合であることが定量的に示された。これは天声人語の読者、いわば社会が国内と国際間とに同じような比率で関心を向けていることを反映していると言える。更に、環境と自然災害については約6%あり、ここには環境或いは地震・台風の多い日本の姿が反映されてもいる。

第二に、日本の独自な内容を示す季節文化・風景、伝統的文化などの「日本の社会文化」は全体の19%も示した。これはたとえ日本が大きく国際化しようが、その一方でしっかりと日本に独自な文化が根をはっていることを示していると言えよう。

表4 「大分類」「中分類」の記事数と分布(%)整理 (2001 & 2004年版)

大分類	中分類		記事数と分布(%)	
			中分類	大分類
国内関係	1	日本の社会文化	171(19%)	429(48%)
	2	日本の社会視点	135(15%)	
	3	日本の政治視点	123(14%)	
国際関係	4	国際的視点	253(28%)	405(45%)
	5	国内・国際的視点 (日本が直接関係)	152(17%)	
自然と人間	6	環境視点	24(2.7%)	54(6.1%)
	7	自然災害の視点	30(3.4%)	

4. 特徴的な記事内容の考察

上記3.では各項目の記事数およびその分布から日本の姿を定量的に考察したが、ここでは、上記大分類ごとそれぞれ特徴的な記事内容を考察する。

1) 国内関係

(i) 社会文化の特徴

ここでの特徴は日本人の季節文化・風景、伝統的文化、食文化など古来の文化と、携帯などの最新文化と自然に同居している姿と言える。

〈季節文化・風景〉

日本人の季節文化・風景では、毎年正月元旦におこなわれる年賀風景を述べた「サル年に思う」(2004年1・4)で「年賀状に干支のサルの図柄多い」ことを述べ、そして春には入学や就職を迎える「満開の桜」(2001年3.28)、そのあとには都心の公園にケヤ

キの枝先に若い葉など種々の樹木「東京に春の息吹」(2004年4・18)、「ツツジの魅力」(2001年4.28)などが続き、そして夏にはセミから秋の虫の交替を示す「晩夏の交替劇」(2001年8・23)、秋には中国から伝来し英仏には見られないと言われる憐れ感・風流感の「秋の月」(2001年10.20)、もの侘しさを中国、フランス、日本など各地で語った「秋風秋雨、人を愁殺す」(2004年10.31)、さらに、冬には六甲山(大阪)の樹木や、ヒヨドリ、マゴモにのなかにも春の準備すら見えることを示した「冬の風景」(2001年12.16)など、日本の季節情緒が語られている。

日本人は古来から季節に親しみ、俳句の「5.7.5」では季節が必須である。1年行事は、正月の初詣、豆まき(2月)、女の子のひな祭り(3月)、男の子の鯉のぼり(5月)、祭り・花火、お盆(8月)、中秋の名月(9月)などが伝統的に行われてきた。天声人語に季節文化・風景が多く語られるのもこうした日本の姿が反映しているからであろう。

< 伝統的文化 >

伝統的文化(歌舞伎・舞踊・華道・茶道能・落語・浪曲等)では、舞台に上がるだけで緊迫感華のある歌舞伎役者「中村歌右衛門の神秘的な魅力」(2001年4.2)が述べられているが、この歌舞伎は中国の京劇とよく比較される。それに面白いことに地方の山形県酒田市の日枝神社には「黒森歌舞伎演舞場」があり江戸時代からの村芝居があることが紹介されており、そこでは2月15日、17日の二日間役者、浄瑠璃、衣装、床山、大道具、小道具などは地区自らが担って行なわれているという「雪中の村芝居」(2001年2.19)。さらに「お茶文化」(2004年4.30)。また、毎年1月には恒例の短歌、俳句大会が行なわれており、NHKではその応募作品はなんと12万作品に「言霊の幸ふ国」(2004年1・23)、そして東洋大学ではその「百人一首学生大会(短歌5.7.5.7.7)」(2001年1.13、2004年1・15)の応募数は6万首に及ぶという。さらに付け加えなければならないのは「お茶文化」(2004年4.30)であろう。この他、舞踊、華道・能・落語・浪曲・浄瑠璃などの伝統文化はNHK教育テレビが放送することが多い。

(<http://www.ontvjapan.com/program/gridChannel.php?tikied=0002&ch=004>)。

< 食文化 >・< 食糧事情 >

食文化は社会文化の最も基本的なものである。食糧事情は文化というよりは社会事情に属するものであるが、ここでは食文化と一緒に考察することにする。

まず登場するのがコンビニ食文化である。コンビニでは飲食料品がよく売れ、特におにぎりが主力商品の一つとなっていること、しかし日本人はコンビニに頼りすぎ、その代償として生活のめりはりを忘れつつあるのかもしれないと指摘している「コンビニ文化-便利さの代償」(2001年4.14)。日本人は「そば」が好きだが、その食べ方については「ずるずる」が日本文化だったが最近若い女性は「するする」と音を立てない傾向が強いと述べている「そば屋の静寂」(2001年5.17)。次は「苦味・渋み」の話である。これは日本ならではの味覚であり、それらは山うど、ふきのとう、たらの芽、などの苦い山菜にもある。苦味については米国では反対にそれを消す研究がある。筆者は苦味を感じないコーヒーの何処がよいのか。緑茶の渋みに砂糖の外国人。苦味、渋さを尊重するのは日本の食文化の特徴だと指摘している「苦味の研究」(2004年2・2)。国が違っても苦味の味覚が異なるというのも面白いものである。日本の食文化で、どうし

でも欠かせないのが日本人のマグロ好きである。その漁獲量は世界の1/3、本マグロにいたっては9割以上にもなると述べている「マグロの初競り(せり)」(2001年1・6)。日本は周りを海に囲まれており、魚はマグロに限らず重要な蛋白源のひとつと言われている。他に食べ物好き紹介されているのは卵である。なんと年間に300億個の卵が食卓に上るというから驚きである「鶏卵と信頼」(2004年1・14)。

筆者は日本の食糧の自給率について危機的な数字を出している。自給率が比較的高いのはごはん、焼き魚、のり、味噌汁で85%。しかし豆腐や納豆の大豆ではわずか25%の自給率。食糧全体ではカロリー計算で40%の自給率はしかなく、その輸入食糧は9千億ト・キメートル(米国の3倍)で、農産物輸入はなんと世界の10%に及び、これはまさに世界中から食糧をかき集めているという状況である。こうした事態に国民の9割が食糧供給に不安を抱いておりもう少し国内産が増えて欲しいと思っていることを記している。「日本の自給率」(2004年2・6)。

〈最新文化・電子情報文化〉

上記の文化は日本古来からのものだが、その一方では携帯電話などの普及など電子情報文化の広がりにはすさまじいものがある。特に21世紀の始まりの年に記事が多く出ている。以下五つの記事を列記する。将来海外旅行で使えるソフトの商品化が近いとされる「音声自動翻訳装置」(2001年2・5)、情報化時代は銀行との取引、コンピューター通信、みな暗号であり、これは一つ間違ると盗聴社会にもなると警告する「情報化社会は暗号化社会」(2001年4・13)、昔はドラマ「君の名は」の待つ風景だった。手紙。交換手付き電話もそうだった。しかし現代では携帯電話で「待たない風景」となってしまった「待つ風景」(2001年7・7)、通勤電車の中はかつて読書人口が多かった、作家の故開高健が「旅先、書斎本がないとうろたえる」と言っていた。そんな文化もあってかつて通勤電車の中は読書人口が多かった。それが最近では携帯電話をにらんでいる人増えている「本依存症」(2001年11・1)、次は二冊の女子高生小説で、いずれもパソコンでのチャット(おしゃべり空間)が登場する話である、『インストール』(綿矢リサ作17歳高校生)と『1980アイコ十六歳』(堀田あけみ名古屋の高校生)「女子高生小説」(2001年11・3)である。

そして2004年である。20歳代の若者の3割までが「携帯のない生活は考えられない」と答えている「携帯電話と[つながり]」(11・18)。明治学院大学教授、辻信一さんは、このことを指して「携帯の便利さは、速さと効率を競う社会での便利さで、半面、人と人が向き合うことで得られる大切な「つながり」が失われている」と述べる。

日本文化は、古来文化と最新の文化とで交流し、今後どのような新しいものが生み出されてゆくのだろうか。

〈教育文化・事情〉

意外なことに日本の子どもの学力の低下が指摘されていた。一つは「OECD(経済協力開発機構)の[15歳テスト]」(2001年12・7)で、そこの分析力、論理的思考、表現力などを試す試験では、良い成績だったが読書文化の弱さが指摘された。この3年後の「国際学力調査」(2004年12・16)では日本はアメリカと共にその学力低下が米紙によって伝えられた。このときの総合1位はフィンランドだった。その結論は生徒7人のクラ

ス、数学は17人だが先生2人で教え、最多は19人など、先生は小さいクラスを教えているということだった。また、韓国は全般に成績がよかったが「あまりに厳しい競争社会」が機具されるとしている。

日本は経済力が強いといいながら、この学力低下の問題は将来を考えたとき大変重要な課題と考えられる。

なお、教育のあり方として山本義隆が「磁力と重力の発見」(2004年1・25)の記事で、「公式や原理原則の成果だけを詰め込む作業は無味乾燥に陥りやすい。「ゆとり」と「学力低下」の背反がよく語られるが、公式の背景にあった人間の苦闘を教える。そんなゆとりが教育現場にあれば学力向上につながるのではないかと貴重な提言を行なっている。

(ii) 日本の社会事情

この欄では、日本経済のなかで本当のところ国民の豊かさはどうなのか。そのことを「この国の貧富」(2004年2・23)と題して取り上げている。なかなか味わい深い指摘なので以下詳しく記載する。

先ず貧しさについては、日本人のエンゲル係数(=家計支出に占める食費の割合)は戦後間もない時期では、それこそ60%であり、殆んど食費に使われていたことがわかる。それが現在では平均して20%だから一見して豊かになったように思われる。その豊かさについては、真っ先に言われるのが国内総生産(GDP)であり、それは米国に次いで2番なのでその意味では確かに豊かになった。しかし、このGDPを一人当たりで換算すると先進国中5番目にまで落ちる。更に、物価を考量した購買力平価で計算しなおすと順位は10番以下にまで落ちる。これが国民から見た実感であり、貧富の格差が大きいと感じている。

失業率が高まった。実際、生活保護を受けなければやってゆけない世帯は10年前の1.5倍になった。失業率が高まった。賃金格差が広がった。それらを例に橘木俊詔著『家計からみる日本経済』(岩波新書)が詳述している。

以前も朝日新聞に62歳の無職の人からこんな投書が寄せられた。「3人家族、エンゲル係数50%」といって食費を切り詰める生活を紹介し、年金の一律引き下げをやめて欲しいと訴えていた。確かにエンゲル係数50%というと戦後直後の貧しさと変わりがないと言える。

先週もGDPの高い伸びが報じられた。朗報かも知れないが、同時に、その豊かさの中身を考え直してゆく時代だろう。

(iii) 政治事情・風景

ここでは日本の現在の姿を特徴よく表すものとして平和と戦争の問題、国家財政の問題の記事を中心に選択した。

<平和と戦争の問題>

先ず平和の問題については「強い世論の平和志向」(2001年5.4)を最も注目した。日本の憲法9条では、① 問題の武力による解決を禁じ、② その目的を達成するために、軍隊の保持および交戦権を禁じている。

その憲法の世論調査で「憲法を変えてもよいが、9条を変えるのは困る(74%)」と圧倒

的多数はこの平和憲法を支持している。この9条に対する定着は強く「憲法を変えてもよいが、9条を変えるのは困る」と回答しているのである。「9条を変えない方がよい」「戦争放棄条項が日本、アジアの平和と安定に役立った」がともに74%というのは大きい意味をもつと指摘している。

この憲法9条の精神とは反対に、戦争への舵をとったのが小泉政権であり、首相は今回、アフガン、イラク戦争に対して、アメリカの要請に従い自衛隊の海外派遣を進めた。これは日米関係のもとで強く進められたので、ここから先は次ぎの国際関係の中で、その考察を展開してゆくことにする。

〈国家財政〉

次に注目を引いたのは日本の国家財政のことである。

すなわち、2004年度予算によると、歳出の総額が約82兆円。歳入は税込41兆円＋新規国債36兆円、すなわち、日本の国家予算は国債36兆円マイナスの赤字財政だというのである。「[年度]が区切るもの」(2004年4.2)。経済大国といわれる日本の国家財政が44%の借金ということには驚いた。

2) 国際関係

(i) アフガン・イラク戦争と日米関係

表2からも分かるように、21世紀初頭の国際関係の記事で中心となったのはアフガン戦争とイラク戦争である。日本もそれに巻き込まれ、アメリカの要請に応えた。これが日本にとっての国際関係の中心問題であった。

21世紀初頭、2001年「9.11米国テロ事件」が起こった。

この衝撃は大きく米国は、「米国テロの衝撃」(9.13)、「米国の臨戦態勢」(9.18)にも見られるように戦時体制へと進み、日本もこの波紋で米国は[日本には目に見える参加を]、「急がば回れ」(9.11)、そして[急に自衛隊による参加を]と言い出したことを述べている「デッド・オア・アライブ(死か生か)」(9.27)。更に、米国务長官は[日本に旗を見せてくれ]と、アメリカは自衛隊派遣を強く要請してきた「[旗]にこだわらず」(10.5)。

これに対して、日本はアフガン戦争では軍艦がインド洋までゆき、そこから燃料の空輸など後方支援をした。ところが、2004年イラク戦争では、遂に、政府は以下の記事に見られるように自衛隊のイラク派遣に踏み切った。

先導隊が国論二分のなか任地へ「自衛隊、イラクへ」(1.20)、この自衛隊員のイラク派遣は「ルビコン川を渡っていく」感が深い、まさに「日本の大きな岐路」(1.24)を示すものであった。そして「自衛隊にイラク派遣命令」(1.27)が下った。この記事では、そのときイラクの大量破壊兵器米調査団の団長が辞任したと書いている。辞任の理由は「調査したけどあったとは思わない」、つまり大量破壊兵器は見つからなかったと述べた。これは先制攻撃の根拠を失ったことを意味する。自衛隊はそこへ派遣されたと。

自衛隊はついに戦闘地域に上陸させた。しかしながら、現在の憲法では国の交戦権を禁じているので実際の交戦に至らずにいる。そういう意味では日本国憲法は交戦の歯止めとして機能していることになる。

今まで見てきたように、日本は一方では米軍と戦争へ進み出した。その一方それを禁じている憲法を守ろうとする勢力もある（上記「強い世論の平和志向」（2001年5.4））。これが今日の日本の最大の姿ともいえる。

一方、著者は「大きすぎた犠牲」（2001年8.14）で「小泉首相は靖国の参拝を選んだ。戦争の犠牲が大きすぎた。日米開戦を避けなかった指導者の責任は？小泉首相に尋ねたいところだ。」と批判をしている。このとき以来、それまで毎年相互訪問していた中日の首脳会談が開かれなくなった。一方では、日本と中国の貿易の規模が急速に拡大しており、2004年の日中貿易（輸出入合計、香港を含む）は、22.2兆円と米国の20.5兆円をはじめて上回り、中国は、日本にとっての最大の貿易相手国となった¹⁾。

この経済的な現実を見ると、日本は米国、中国と等距離で平和的に交流した方が合理的であると思う。それがアジア全体の平和と発展にとっても重要な役割を期待できると考えられる。

註1：資料は財務省「貿易統計」で[社会実情データ図録]から転載。

<http://www2.ttcn.ne.jp/~honkawa/5050.html>

(ii) 日本の国際関係史概略

ここでは上記に見た国際関係を歴史的にとらえ直すため、国際関係史を概略してみることにする。先ず日本の国際関係史だがそれは大きく分けると次ぎの五つの区分になると考えられる。

(イ) 古代から室町時代

この時代は大陸、すなわち中国・朝鮮半島との関係が主であった。

3世紀には邪馬台国が三国の魏に使いを派遣し、5世紀には漢字が入ってきて日本では始めて文字を持つようになった。そして6世紀の欽明天皇の時代には朝鮮半島の百濟から高い文化と仏教が伝来した。このときは五経博士、僧、易博士、曆博士、医博士、採薬師、楽人などの人材が交代制で派遣されており、それは幕末・明治期に日本に招かれた多数の外人教師の古代版ではないかと思わせるものがあつた。その後、聖徳太子時代の遣隋使派遣、奈良・平安中期までの遣唐使派遣、唐船の頻繁な来航、その後、宋銭・明銭が平安後期から鎌倉、室町時代に入ってきて日本に貨幣経済を導入した。

(ロ) 戦国時代から江戸初期

こうして今まで、大陸一辺倒であった日本の国際史に一つの転機が訪れた。それは1543年のポルトガル人による鉄砲の伝来とキリスト教の伝来である。戦国時代、それは織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三代にわたって統一され江戸時代に継承されるのだが、最初の織田信長はいち早くこの鉄砲に目をつけて勢力を伸ばし、一方、宣教師を利用して西洋文明を積極的に取り入れた。彼は日本人で始めて地球儀を見て地球が丸いことを理解したという。これが西欧と日本の最初の本格的な出会いであった。この時期九州地方ではキリシタン大名まで出、そこからローマに少年使節団が派遣された。信長の後、日本を統一した豊臣秀吉は朝鮮半島に出兵し、そのとき九州で西洋が布教を手段に日本の支配を狙っていると判断しキリシタン追放例を出すに至った。

秀吉の後、江戸に幕府を開いた徳川家康は初期の頃は諸外国との貿易振興策をとった

が、キリスト教禁止令へ動いた。

(ハ) 江戸時代

第三代将軍家光は鎖国令を敷き、全国の大名に外国との交易を禁じ、唯一、幕府が長崎の出島を通して中国・朝鮮・オランダと交易するだけになった。この時代は長崎の窓を通して中国の朱子学を採用し、朝鮮通信使を迎えるなど再び大陸中心の交易になった。そして、中国にアヘン戦争があった頃、日本ではオランダ医学を通して再び西洋学問が入りだし、幕末にアメリカのペリー艦隊が来航して以来、動乱を産み出し江戸幕府は滅びて明治維新を迎えた。

(ニ) 明治維新から戦前

この時代は圧倒的な西洋文明に触発された明治政府の文明開化とそれに基づく富国強兵が始まった。力をつけた日本は朝鮮半島・中国への侵略に乗り出し、最後にはアメリカと戦端を開いて敗戦する。このときの日本は「脱亜入欧」であり、そこには古代からの大陸に対する畏敬の念は最早無かった。

(ホ) 戦後

アメリカに占領された日本は日米軍事同盟(日米安保体制)を結び、その基調が今日に至っている。この度のアメリカのアフガン戦争、イラク戦争での自衛隊の派遣もそのことが具体化したものであった。戦後の日本には戦前の「脱亜入欧」の精神が残された。

しかし一方、1972年に中日の国交が回復し、80年代の改革開放政策とともに中日貿易は年々増大し、遂に2004年日本の対中貿易は対米貿易を上回ることになった。

ここに来て、日本は明治維新以来、西欧、そして米国と傾いた国際史に、再び大陸との関係が最重要な問題として登場してきたのである。

こうしてみると、この『天声人語』で見た日本の対米関係と対中関係もこのことを反映していると考えられる。

この中でも現在見落としてはならない重大なことがある。それは昔と違って国際関係に国民が大きく進出してきたことである。年間1600万人にも上る膨大な海外旅行の人口がそうである²⁾。また、私が留学中、日本のスポーツ選手が90年代からアメリカの大リーグ野球や欧州・南米のサッカーにどんどん挑戦していったのを見ている^{3, 4)}。そればかりか、日本国内では今まで国技とされた大相撲にモンゴルや欧州の力士がどんどん入門し国際的な様相になっていると聞く。最近では、卓球の福原愛も中国のプロリーグに挑戦している。これらスポーツの国際化は「杞憂だった南北の対立」(2001年5.22)の中でも一部「このところ国境を越えるスポーツの話題が豊富:大リーグのイチロー、イタリアサッカーの中田英寿、フランス競馬の武豊、相撲ではモンゴル勢のがんばり」と触れられている通りである。更には、外国に派遣される企業の駐在員の存在が特に中国などで増加している。

昔の国際関係では、人物も限られていた。ところが現代の国際関係に国民が主役を演じる時代になってきている。国民は本質的に平和を好む。国民の登場する国際関係は今後、今までにない新たな前進面をもたらすことであろう。

註2 平成17年版 観光白書(観光の状況に関する年次報告 図2-1-5 日本人海外旅行者数の推移)

註3 2005シーズン総括(大リーグ) (<http://www.asahi.com/sports/bb/mlb.html>)

註4 サッカー海外で活躍する日本人選手(12月20日 日本時間)

<http://www.asahi.com/sports/fb/world.htm>

3) 環境と自然災害

(i) 環境問題

「有明の海とノリ」(2001年12.23)

昨年ノリが記録的な不作になった。これは諫早湾の干拓事業が干潟の浄化作業を奪い、それが赤潮を発生させたのだと疑われた。このことは人間が開発を行なうときは、先ず第一に自然の能力を活かすことが重要であることを教えている。

「[水際]の問題点」(2001年11.19)

人間は川底と兩岸をコンクリートにして「水辺」や「浜辺」をつぶしてしまう。すると、水辺に生えていたヨシが消え、ヨシの群落で湖水の浄化機能やヨシ原で行っていた魚の産卵などが消失した。こうなるとヨシ原と魚の生態系、さらには人の癒しまでも壊してしまう。これは人間がいかに生態系を保つことが大事かを教えている。

「木から林、森へ」(2004年3.22)

林：育成するという言葉「ハヤス」の名詞形、森：自然の樹林

林野庁が新年度から森林の癒し効果について本格的に解明を始めるという。都会周辺の林や鎮守の森についてもやってもらいたい。映画「森の学校」は『少年動物誌』が原作であり、そのなかでは、親と子の縦のつながり、人と、時を共にして生きている動物との横のつながりがあり、二つのつながりが交差しあい、また、寄り添うようにも見えるところである。これは家族と人と動物との共生が互いに大切であることを示したものと見えよう。

以上をまとめると、

人間は自然の能力と生態系を活かしながら自然との共生を図ることがいかに大切であるかが分かる。林野庁が「森林の癒し効果」について本格的に解明を始めるということは大きく期待できそうである。

(ii) 災害と避難・支援

日本では三宅島の人たちの厳しい避難生活が続いており(2001年2.28)、ここでは火口からは今もなお火山ガスが噴出し、全島の避難からまもなく半年目である。

そして、2004年今度は、京都舞鶴市の台風23号でバスの水没(2004年10.22)、新潟で[震度6強](2004年10.24)が立て続けに災害が起こった。

この教訓としては、行政の迅速な避難勧告が大事であり、そのためには日頃らの備えと迅速さが求められた。また、日本では地震は宿命でその予知は未だに難しいが、それでも迅速に力を合わせれば、被害の拡大を防ぐことはできるとした。

5. まとめ

「今日の日本の姿」の特長の一つは、古来の季節感や伝統的な文化が携帯などの最新文化と自然に同居している姿である。一方、国際的視点の記事が全体のほぼ半数近くも

占めるなど国際的な関心は高い。それが、例えばスポーツなどにも表れ野球やサッカーでその技術レベルの高い外国に就職したり、また、内には最も伝統的な国技といわれた相撲にまで外国人力士が増えてもいる。

この国際化では、日本政府はアフガン、イラク戦争でアメリカの要請に応じて自衛隊が海外に出てゆくなど国論を二分している。その一方、国民の平和への志向は強く、戦争を放棄した憲法9条の改変には「ノー」の姿勢を見せている。これを見ると、アジアの平和のために、中国も平和志向する日本国民との交流・連帯が極めて重要と考える。

今日の日本は国内総生産（GDP）が世界第二位でありながらも貧富の差は拡大し、また、最も重要な食糧の自給率がカロリー計算で40%しかなく、国家財政も借金であった。もう一方の側面では日本の貿易量は今まで対米関係が第一位であったが、それは昨年には対中国関係が第一位に変わったと報じられている。日本は今後、中国を始めアジアとの関係が益々重要になってゆくと考えられる。

また、環境については、人間は自然の能力と生態系を活かしながら自然との共生を図ることがいかに大切であるかが指摘された。そして自然災害については、迅速な避難勧告が大事であり、そのためには行政の日頃からの備えと迅速さが求められた。

6. あとがき

『天声人語』の良質な資料力のお陰もあってここに本論文の目的を達成できたことを嬉しく思います。

さて、本学の日本語学科では日本語言語・日本文学・日本文化の三つを基本としている。その基礎に立って、3年生からは更に日本社会、日中関係なども取り入れ、学生に視野を広げてもらうことが必要だからである。これはまた、4年生の卒論テーマの布石にもなるし、卒業後の日系企業就職や日本留学にも役立つと考えるからです。

この趣旨から私も日中関係史の講義を担当して4年になる。このたびはそれに加え、さらに日本社会について研究・考察することになった。この天声人語は「はじめに」でも述べたように、一つは大学入試で多数取り上げるなど高い文章力をもち、もうひとつには森羅万象の出来事をよく対象としていた。今回は21世紀の始めということで2001、04年のもの約700例を対象としたが、その後続く天声人語の分析・考察をさらに加えて行くなら、本論文の内容をさらに充実・発展させることができるであろう。

なお、本論文の調査活動では顧越、朱葆娜、黄晓松、王長偉ら四名の学生達の働きがあったことを紹介しておきたいと思います。

更には、朝日新聞社の山崎真紀子様には朝日新聞と天声人語について懇切丁寧なご説明をいただきましたことお礼申し上げます。

【参考文献】

朝日新聞論説委員室『天声人語』2000～2004年版。

村井康彦著『日本の文化』岩波書店 2004年第3刷発行。

家永三郎『日本文化史 第二版』岩波書店 2002年第39刷発行。

笠原一男、藤野道生、野呂肖生、鳥海 靖著 『詳説日本史研究』山川出版社
1994年 第1版25刷発行。